

ぞーっと身震えしたが氣を取り戻し、ねらいを定めてドーンと一発放した。

ところがどうだろう。弾はそれで祠の屋根板を打ち抜き、鴨は何事もなかったようにすいすい泳いでいるのではないか。

狩人は身の毛のよだつ思いで、しばらくの間ぼんやり立ちすくんでいると、池の中程が盛り上った。見る間に、次第に水かさが増し、やがて堤を越して狩人を追いかけるのである。

狩人は鉄砲をなげ捨て、うしろを振り向く勇氣もなく、まっ青になつて家に逃げ帰り、口もきけず、雨戸を全部締めきつて寢室に隠れた。

ところが、大きな蛇が鶏窓から入り込んで、恐れおののく狩人の体に巻きついて離れようとしなない。

そこに弁天様が現われて

「祠の屋根は水鳥の身代りになった。葺き替へよ」とお告げになった途端、弁天様も大蛇も姿を消した。

それ以来、屋根は何回葺き替へても弾の穴があくので、その後石造りに建て替へられ、狩人の家は子孫代々鶏窓を造らなくなつた。

弁慶の笈

(笈とは修験者が経文、仏像を入れて背に荷う箱)

今泉字堀の内の大銀杏の下に小さな祠(一坪位)があつてその中に弁慶の笈と言ひ伝えられるものがある。昔し義経の家来、武蔵坊弁慶が此の地に來たおりに置き残したるものとか。

武蔵坊弁慶は京都比叡山の西塔に住み、文武共にすぐれた剛の者であつて、後に源の若大将、牛若丸と京都五条の大橋で主従となり、それ以後牛若丸が義経となり源氏の大將として兄、頼朝とともに平家を滅し、頼朝が天下統一に抜群の功績を残しながら兄、頼朝の怒りにふれ東北、平泉の衣川の館で命を終るまで生死を共にした名高い僧兵であるが、事実弁慶がこの地に來たかどうか、來たとすればいつの頃か、またなんの理由をもつて來たのかと、いろいろ考えさせられるし、そう考えるのが世人の通例ではなからうか。

これについてすこし長談議に流れるきらいはあるが興味深く義経、弁慶主従について考察してみたい。

武蔵坊弁慶は義経がまだ牛若丸といつて京都の馬山にあずけられてゐる頃、五条の大橋で主従の縁を結び以後、牛若丸と共に当時東北の豪商、金売り吉次の手をかりて平泉の藤原秀衡のもとにゆき、この地で成人となり源氏の軍勢を養ひ、時期の到來を待っていたものである。

藤原秀衡は当時、陸奥国一円を治める豪族にして昔し源義朝(義経の父)に武士としての恩義をうけたことがあるので義経に對しては身をもつてその安泰を護つたのである。